

# 一橋大世界史



## 16章 19世紀の中国・朝鮮・日本 I

### 添削課題

#### 解答例

17世紀以降、朝鮮は日本に通信使を送り、日本からも対馬藩が使節を往来させており、君臣関係がないという意味で対等な関係だった。一方、朝鮮は清の藩属国として朝鮮国王の称号を受けており、清を主君とする君臣関係にあった。明治維新後の日本は、不平等条約である日朝修好条規を朝鮮と結び、朝鮮を対等な主権国家と見なした。日清戦争に清が敗れると、下関条約で清は朝鮮に対する宗主権を放棄し、朝鮮の完全独立が承認された。(199字)

#### 解説

##### 《朝鮮と冊封体制》

華夷秩序の下にあった東アジアが19世紀末に国際法秩序へ組み込まれていく姿が理解できているかを問う良問である。日清戦争後の下関条約で“清が朝鮮の宗主権を放棄する”という<sup>1)</sup>ことを丸暗記ではなく理解しているかがキモになる。

この時代の東アジアは日本の大陸侵略という粗雑なストーリー展開で説明できるものではない。日本が朝鮮半島に影響力を行使できなかった場合、朝鮮は独立を維持することができていたと考えることは大きな間違いであって、もし、日清戦争で清が勝っていたら清の朝鮮への宗主権が認められたままになっていた、と考えるべきであろう。

19世紀のアジアを学習する際に、“侵略と抵抗”といったストーリーにするのは用語を覚える意味では便利なのかもしれないが、現実の大学入試においては、論述問題で問われる知識は歴史用語だけではない。アヘン戦争を学習するとき、単純にイギリスの中国侵略とかそういうレベルではなく、華夷秩序と国際法秩序の衝突という文明間の対立が根底に横たわっていることに目を向けなければ、いつまでたっても教育から学問には脱皮できない。どうしても19世紀から20世紀前半のアジアの歴史は、自らの国に関することが絡むために政治的な意味合いが強くなってしまふ。そのことを踏まえた上で当時の事情をつかみ、なおかつ現在の政治的要求からもとらえるという思考と態度が必要とされる。

この問題では「不平等条約」という用語の意味を根本から理解することが重要である。条約の内容について触れるものではなく、条約を結ぶということがどういうことなのかを理解する問題なのだ。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。





会員番号	
------	--

氏名	
----	--